

# ピーマンの生分解性ポット苗を使って、モザイク病による被害を省力的に抑制

農業総合センター鹿島地帯特産指導所

ペッパーマイルドモットルウイルス（PMMoV）によるピーマンモザイク病は、抵抗性品種による防除が可能です。発病ほ場に抵抗性品種をそのまま定植すると、ウイルスに対する防御反応である過敏感反応により株が枯死する場合があります。これまで生分解性ポットの浅植え等で枯死を抑制してきましたが、定植やその後の灌水作業が非常に大変で普及のネックとなっていました。そこで、過敏感反応による枯死を抑制でき、かつ定植や灌水作業労力が慣行と同程度になる新しい定植技術を開発しました。

## 新旧の定植方法



図1 新旧の定植方法

新しい定植方法では、生分解性ポット苗をポットが完全に隠れるように深植えします（図1の右）。これまで生分解性ポットの浅植えやちり紙で根を保護する定植法（紙包み法；図1の右）では定植やその後の灌水作業が非常に大変でした。

## 枯死を減らす効果

新しい定植方法では、苗がウイルスに汚染された土壌と接触しますが、ポットをはずして定植した場合（慣行）よりも、過敏感反応による枯死を抑制できます（図2）。

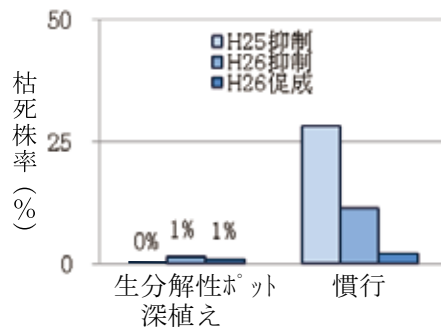


図2 過敏感反応による枯死株率

## 定植時間と灌水回数

1株あたりの定植時間は慣行定植と同じ約10秒/株で、これは既存の定植法である紙包み法の約1/3の時間です。また、定植後の手灌水の回数は、生分解性ポットの浅植えに比べて少なくすみ、慣行（ポットをはずして定植）より1回多い程度です（図3）。

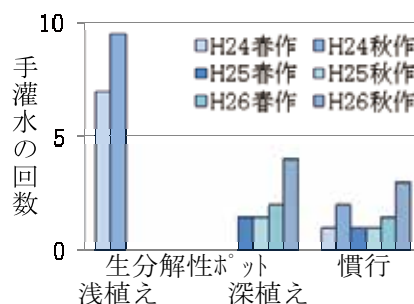


図3 定植後から活着までの手灌水の回数

## ピーマンの収穫量

収量は慣行と同程度（慣行対比96%）です。